森は海の恋人運動も十六年が経過した。

海で暮らす漁師がなぜ山に植林を、という意外性。山に翻った大漁旗という視覚に訴える行動。森は海の恋人という耳に心地よいキャッチフレーズなど、今になって考えると本職顔負けの演出が効いたのか、各方面から注目を浴びた。

このスピード時代、どんな事柄も年月がたてば賞味期限が切れる。ところが、ここにきて新たな展望が開けてきている。

◇

事の始まりは三陸・気仙沼湾で牡蠣の養殖を生業とする漁民が、赤潮まみれの海を青い海に戻したい、そして美味しい牡蠣をつくり続けたい、と思ったこと。極めて素朴で純粋な動機からであった。

牡蠣の産地は世界中、河口の汽水域に形成されている。牡蠣の餌である植物プランクトンは、森林の腐葉土層を通過した河川水に含まれる養分によって殖えるからだ。

汽水域はこの植物プランクトンの最も豊富な海なのである。だが諫早湾の例を引くまでもなく、川の流域に暮らす人間の意識によって汽水域の生死が決まる。ある意味で厄介な海でもあるのだ。

この海を守るには、川の流域に暮らす人々に、その価値観を共有してもらわねばならないことにも気がついた。

森は海の恋人運動 新たな展望

汽水域守る研究始動

林学から水産学まで

今年も森に大漁旗が翻った「森は海の恋人植樹祭」（6月6日）

畠山 重篤

はたけやま・しげあつ　一九四三年、中国生まれ。牡蠣養殖業。「牡蠣の森を慕う会」代表。著書に「リアスの海辺から」「日本〈汽水〉紀行」など。

これは教育の問題が絡むな、と直感したのは行動を開始した翌年、平成二年（一九九〇年）であった。

その年から気仙沼湾に注ぐ大川上流の岩手県室根村の小学生を海に招き体験学習を始めた。海からわずか二キロしか離れていない所に住んでいる子供たちだが、あまりにも海は遠い存在であることを知り愕然とした。

船に乗せて養殖筏に連れて行き、牡蠣を引き上げて見せたところ、開口一番「餌は何をやっているのですか」という質問がきたのである。作物には肥料、家畜には飼料を与えている農家の子供だけに、生き物を育てるには餌をやるのが当然だと思っていたのだ。

海の中では、プランクトンが自然に発生するから餌をやる必要はないと説明すると、「漁師さんはドロボウみたいですね」との答えが還ってきた。

その後、ドロボウの汚名をすすぐべく、ブナ、ナラ等の広葉樹を三万本植え、体験学習も六千人の子供たちを受け入れてきた。

◇

汽水域を守るということは、突き詰めれば人間とは何か、という極めて根元的な問題に突き当たる。小中学校の教科書にこの運動が取り上げられるようになったのも、その意義が理解されてきたからだと思う。

汽水域のメカニズムを科学的に解明する学問は、遅れに遅れていた。森・川・海・人間。どこから手をつけたらいいか難解なテーマであると同時に、縦割りの学問体系が研究を遅らせていた。

全国の大学に先駆けて京都大学がその研究に着手した。京大フィールド科学教育研究センターのスタートだ。林学から水産学までの教授らが二十六人も張りついた本格的な組織である。センター創立を記念して、六月から京大総合博物館で企画展が催された。

「森は海の恋人の世界へのいざない」というタイトルであった。この種の企画展では異例だという一万人を超す来館者があった。

汽水域研究の最重要課題は、そこが海の森だという概念をうち立てることである。大気中に含まれるCO_2の五十倍の量が海に溶け込んでいるといわれ、それを固定化しているのが、植物プランクトン、海藻であるからだ。

一説によると、陸の全森林の二倍の力を海の森林が担っているという。

海から蒸発した水が雨となって陸の森を育て、そこから流れ出す養分が海の森を育む、という循環が見えてきた。その途中に人間の生活も在るのだ。河口の岩にへばりついている牡蠣はとっくの昔にそのことを知っていたに違いない。